



## 特集 地元で働けるしあわせ

島原翔南高校の生徒たち企業に訪問して南島原をPRする「ふるさとPR大使」。多くの企業や大学などを訪問しました。

### 南島原市で仕事をするメリット

生徒たちが、県内の企業を選びにくいもう一つの理由、それは「住むところ」だそう。県内企業では自宅通勤が前提のため、寮や社宅などを保有していない事業所が多いようです。生徒たちにとってアパート

### 企業の望む理想像

企業が望む生徒像を尋ねたところ、「コミュニケーション能力が高いこと、やる気や責任感があることに加え、あいさつがしっかりできること」だそう。どれも当たり前のことではあります。一方では、一朝一夕で身に付くものでもありません。就職を予定している人も予定していない人も、ちょっと心がけてみてみませんか？

## まとめにかえて 平成21年度の就職戦線

長く続く雇用氷河期の中でも、最も厳しいと言われる平成21年度の雇用情勢。

例年は就職率100パーセントを誇る島原翔南高校も例外ではありません。2月15日現在、懸命な就職指導が続いています。

### 生徒が県外を選ぶ理由

同校で、県外を希望する生徒は全体の半数。県内では求人数の少ない職種に就職するために、県外を目指すしかない、というのが主な理由だそうですが、それだけではありません。

県内の求人のおおくは、就職活動解禁の9月中旬から大きく遅れることも少なくありません。早く確実に就職したい生徒たちにとって、県外の企業を優先させるを得ないのが現状です。

### よりよい人材の確保のために

ところで、このことは、「県内の企業が、『よい人材を獲得する機会』を逃している」とは言えないでしょうか。

「実際には県内就職を希望している生徒たちも多くいます。このような地元を愛する若者が、一人でも多く残ってもらえればいいのですが」と、島原翔南高校進路指導部は言います。企業にとって人が財産であるのは、全国共通。早めの求人、生徒、企業の双方にとってメリットがあることはもちろん、地域としてのメリットにもつながります。経営者の皆さん、例年よりも少し早めの求人を、検討してみたいかがでしょうか。



Part3

## まちづくりに携わるしあわせ

ありえ蔵のまち保存会会長・南笑会（なんしょうかい）副会長

## 吉田嘉明さん(有家町)

撮影：田中洸太郎



毎回楽しみにしている人も多い「ありえ蔵めぐり」。蔵の雰囲気を楽しめるほか、手ごろな価格で地元の特産品が手に入るとあって、リピーターも多い。写真は、浦川酒造（有家町）

今年で、5年目10回を数え、多くのリピーターが心待ちにしている「ありえ蔵めぐり」。このイベントを主催する「ありえ蔵のまち保存会」の会長の吉田嘉明さん。

吉田さんは、このほかにも、まちづくりグループ「南笑会」でも、同会の酒井洋一会長らとともに、「自分だけのお酒をつくらう」と銘打ち、米作りから酒造りまでが体験できるイベントを行っています。

吉田さんが、まちづくりに取り組むきっかけとなった「ありえ蔵めぐり」。それは苦しみの中で生まれたといいます。

「このままじゃだめだな、ということだけはわかっていました。」

当時は、日本酒の消費量が落ち込んでいた。そんな中、あるアイデアが。「せっかくだから蔵を見てもらおう」とこうして、その前身となる「蔵開き」が始まります。その後、県の担当者の目にとまったこと、商工会や同じ志の仲間との協力などもあって「ありえ蔵めぐり」としてスタート。今のにぎわいにつながっていききました。

イベントを通して、吉田さんは、「生の声」の大切さに気付いた、といいます。「正直、最初、自分たちには自分たちの良さがわかりませんでした。だって、私たちに」とっては、日常的で、ごく普通のことですから。お客さんの言葉で初めて「自分たちはすばらしい」と実感できました。それにね。生の声は、私たちが次に何をすべきか教えてくれる。とてもありがたいですね」

まちづくりが生の声を引き出し、生の声が次になすべきことの道しるべとなる。そんなまちづくりを、吉田



南笑会の酒造り体験。米が酒になる。その感動が忘れられず、毎年参加する人もいるのだとか。

さんたちは今日も続けています。

吉田さんは、本業でも活躍しています。昨年11月に、福岡国税局の鑑評会純米酒部門で金賞を受賞。県内では、吉田屋だけが受賞しました。

吉田さんは、それも、この地「ありえ」だから受賞できた、と言います。「南島原という土地は、地理的なハンディがありますね。ですが、お客さんに品質やこだわりが説明できて、納得して買ってもらえる。そして、納得のいくまで仕事ができるのは、この土地だからこそ。私たちにあって、地理的ハンディは、欠点でなく、個性なのです」これからは、不便さも「武器」となる時代が来るのかも知れません。

を借りることは、経済的にも厳しいため、結果として寮などを備えている県外企業を選びがちだそう。

これを逆に言うと、「家から通える地元企業への就職や、家の事業を手伝うことは、魅力的な選択肢」とは言えないでしょうか。5人家族が1人暮らしの5倍の生活費がかかるわけでは、ありません。一緒に住むことで、環境にも優しく、生活費も少なくて済みます。何より、家族と一緒に暮らせる、近くに住める、ということ、よく考えると、とてもしあわせなこと。世知辛い世の中です。愚痴の一つも言いたいことだってあるでしょう。ですが、今、ここに生きていて、家族と共に暮らす。このこと自体がしあわせなことなのだと、そう思います。

## チャンファイジャ カンカン 「常回家看看」 (実家に帰ろう)

毎月、国際交流員の陳凌弘さんが中国の言葉を紹介!! 中国の言葉でごあいさつ



中国では、春節も終わり、再び実家から都会への移動ラッシュがまもなく始まります。駅や空港では、「常回家看看」の曲がよく流れています。

「常回家看看」とは、1999年、中央テレビの「春節交歓の夕べ」のデビューをきっかけに国民歌と呼ばれるほど流行った歌謡曲で、曲名の「常回家看看」も、今ではことわざのように、日常的に使われています。直訳すると「実家にちょくちょく帰り、父母に顔を見せましょう」という意味。「回家」は「家に帰る」。「看看」は「見る」と言う意味を重ねて、「見てみる」という意味になります。

歌詞中も、「ちょっとした時間に、家族で実家に帰って見てください。笑顔でおみやげをもって。お箸や茶碗を洗ったり、肩をもんだりして。やることは、どんな小さなことだっていい。なぜなら、親は子どもに何も求めはしない。ただ元気な顔をみただけなのだから…」と続きます。

どんな家族も、永遠と一緒に暮らせるわけではありません。皆さんも、家族との時間を大切にしてくださいね。